



高専入試 / 高専のための学習塾

ナレッジスター

第一回 高専模試

国語

(配点)

1	12点
2	24点
3	35点
4	29点

(注意)

1 解答を戻る際には必ず画面下の「戻る」ボタンから戻るようにしてください。

その他の方法で戻ってしまうと、今までの解答が消えたり、

再度パスワードを求められる場合があります。

2 問題冊子は受験開始するまで開かないこと。

3 問題冊子は必要に応じて印刷し、手元において受験すること。

4 試験時間は五十分です。時間は自分で計って受験し、時間になつたら解答を送信してください。

5 一つの解答欄に対しても、複数のマークを塗りつぶしている場合は有効な解答にはなりません。

6 回答は、解答用紙の指定されたマーク欄にマークすること。

指定されたマーク欄以外にマークしても有効な解答となりません。



次の（1）から（6）までの傍線部の漢字表記として適切なものを、それぞれアからエまでの中から一つずつ選べ。

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| (1) 海にノゾむ家。ア 望 イ 臨 ウ 希 エ 想 | (2) 間違いを指テキする。ア 敵 イ 滴 ウ 摘 エ 適 |
| (3) 真ケンに戦う。ア 險 イ 剣 ウ 檢 エ 儂 | (4) 成セキを出す。ア 積 イ 責 ウ 跡 エ 績 |
| (5) 規ソクを守る。ア 則 イ 測 ウ 側 エ 卽 | (6) 雜誌に掲サイされる。ア 載 イ 栽 ウ 裁 エ 採 |

2 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

自分は、かねがね從來の文章の解釈法、殊に和歌について、（1）（注1）先達諸家のやりくちにはなはだ（注2）あきたらぬふしが多い様に思うてゐる。もともと、解釈と（注3）訓詁とは主従の関係に立つもので、前者が全般的なるに対し、後者は部分的である。徹頭徹尾後者は部分的という絶対性をもつてゐる。部分的なるものの全般的に拡充するには、数多の部分性の集合を要する。（注4）畢竟部分性は物の一面である。立体的事実を築き上げるには、必ず異平面の集合を要するので、望む所は、異種の部分性である。訓詁は、解釈の基礎をなす有力な材料の一つであるが、同時に解釈にいたるには、なお他の部分性の総合を要する訳である。さらいうと、解釈は、内容を説明するのであるが、訓詁は、内容を作るみちの言語の説明、または（注5）言綴によつて約束せられた事実の説明以上に出るものではない。殊に韻なり律なりをもつてゐる文章においては、通常の散文の上になお付加された若干の部分性があるので、ますます以つて訓詁ばかりでは足らぬことがわかつてくるのである。こんなことは、誰しも考へてゐることで、事新しくいうのが、かえつておかしなくらいのものであるが、さて實際には、一向忘れられている姿である。

【中略】最も完全な素質を備えた読者が、文章に對して得るだけの内容を、出来るだけ適当に忠実に伝えるのが、解釈のねらう点ではあるまいか。（注6）本居翁の（注7）古今集遠鏡の如きは、比較的内容を出さんとするに努められた痕が明らかで、一讀すれば、翁の頭脳の明確なのに驚くばかりであるが、まだまだ言語形式ばかりにどらえられていた痕が見える。けれども、それから後の国学者の解釈法には、翁以上に出たものはないとと思う。

（2）貫之の

A 糸によるものならなくにわかれ路の心ぼそくもおもほゆるかな

を解いては、別れ路のこころといふものは、糸による片糸のようなものじやないけれど、心細いものであるわい、といふやうなやりくちである。A（の和歌）を見ても、この歌が、昔古今集の歌屑と言わ（3）れておつたことが見えてゐるが、これは、一つは鑑賞法が進まなんだにもよるけれど、解釈法の不完全であつたのも一つの原因がある。

（4）（注8）逐字訳といふもの、これも和歌には効果がない。遠鏡は、出来るだけ逐字訳をして、簡単な形に（注9）つづめようとしたものであるが、和歌の性質上、逐字訳は許されぬのであるから（このことは（注10）「和歌批判の範疇」を参考せられたい）、むしろ強いて内容をつづめるよりも、読者がその歌について知るべき内容の中心を摘出するに止めておくがよろしかろう。そうであるから、時には、（注11）勢い原形式の数十倍以上の語をも費や

さなければならぬこともある。自分は、これから、難解と思われる歌の解釈をやつてみるが、その解釈法は、これまでのやり口と、多少変わった方法を以つてしたいと思う。勿論自分は、今評釈をするつもりは毛頭ない。

B ながめつつまたはと思ふ雲の色をたが夕ぐれと君たのむらむ（定家——玉葉）

ながむという語は、日本語の中でも、(5)最も洗練せられた詩味の豊かな言語である。今日の口語では、「眺（チヨウ）」の意味一つであるが、中古文には、そればかりではあてはまらぬことが多いので、これに詠の字をあてて見たのもあるけれど、ながむという語の内容は、決してそんな単純なものでないことは、諸君も業に承知のことと思うが、この語は、大体に、二つの違った意味を包含しているので、その間に生じたものはさておいて、この二つについて見ると、やはり「眺」の意のものと、「おぼめく」意のものとに分れる。「眺」の方は、むという音に「見」の意があるらしく、「おぼめく」方には、「なが」に似か寄つた「なげく」の意がほのかにうかがわれる。「なげく」と「ながむ」とのごとき形式は、同意義の語に屡々ある類似である。すなはち、この方は、心にある結ばれたところがあるので、解剖して見ると、「眺」の意のものとは、語源を異にしている別種の語であるが、和歌には、盛んにこの語を両様にかけて用いたために、古典研究者の頭には混同され、今ではほとんど両意融合という（注12）塩梅になつたのであるが、もともと別種の語であつたには違ひなかろう。この語の内容には、（注13）霖雨（ながめ）、長むなどいう別種の言語の感じも伝習的に附加えられて、一種の憂鬱な思いに耽つてゐる時分の有様を表わすに適當な語となつてゐるが、「眺」の意は、明かに存してゐる。それで、多く和歌には、ぽかんとして思いに耽つて、何処とあてどもなく見入つてゐる心持に多く用いて居る。

（折口信夫「古歌新釈」より。問題作成にあたり、一部改めた箇所がある）

- (注1) 先達諸家＝先にその道に通達して他を導く、多くの一派を立ててゐるような人々。 (注2) あきたらぬ＝不満がある。
(注3) 訓詁＝古い言葉の意味を解釈すること。 (注4) 畢竟＝つまるところ。 (注5) 言綴＝書きつづった言葉。
(注6) 本居翁＝本居宣長のこと。後の「翁」も同じ。 (注7) 古今集遠鏡＝「古今集」の注釈書で、著者は本居宣長。後の「遠鏡」も同じ。
(注8) 逐字訳＝原文中の一語一語を忠実にたどつて訳すこと。又、その訳文。 (注9) つづめよう＝短くしよう。後の「つづめる」も短くする意。
(注10) 「和歌批判の範疇」＝作者の著書。和歌作成に必要な段階的觀察点について述べる。 (注11) 勢い＝その時のなりゆきで。必然的に。
(注12) 塩梅＝物事のぐあい、程合い。 (注13) 霖雨＝何日も降り続く雨。ながめ。

問1 本文中に(1)先達諸家のやりくちにはなはだあきたらぬふしが多い様に思つてゐる。とあるが、それはなぜか。その説明として最も適當なものを、次のアからエまでのなかから一つ選べ。

- A 訓詁は解釈にとつて有力な材料ではあるものの、それだけでは内容の説明にまでは至らないことが考慮されていないから。
B 和歌の解釈において訓詁は部分性をもつものであり、これらを全てつなぎ合わせなければならないことを忘れてゐるから。
C 訓詁は部分的であり、解釈においては必要ないにも関わらず、訓詁を重んじてゐるから。
D 和歌にとつてのみ訓詁の部分性は問題視されるべきであるにもかかわらず、いつも訓詁の部分性にこだわりすぎているから。

問2 本文中に、(2)貫之とあるが、これは紀貫之のことである。紀貫之の作品として正しいものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 徒然草 イ 枕草子 ウ 方丈記 エ 土佐日記

問3 Aの和歌で用いられている修辞技法として正しいものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 縁語 イ 掛詞 ウ 枕詞 エ 倒置法

問4 本文中の「言わ(3)れて」の「れ」と同じ用法の「れる」の助動詞を、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 先生が話される イ 昔のことが思い出される ウ 人に憎まれる エ 子どもでも登れる山

問5 本文中に(4)逐字訳というものの、これも和歌には効果がない。とあるが、和歌の解釈に効果的だと筆者が考える内容として、最もふさわしいものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 和歌を解釈するためにはかなりの量の語について知る必要があるため、正確な訳が最も大切だ。

イ 比較的内容を表に出さないようにし、正確な訳を忠実にすることに注力しなければならない。

ウ 和歌の性質上、解釈することは難解であり、読者は完全な素質を養わねばならない。

エ 一言一句正確に訳をするよりも、読み手が内容の中心を抽出する程度にしておくべきだ。

問6 Bの和歌の現代語訳として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 眺めながらあなたを待ちたいものだわ、そんな風に思える美しい雲の色なのに。誰のための夕暮として、あなたは心にかけているのでしょうか。

イ 眺めながらあなたを待ちたいものだわ、そんな風に思える美しい雲の色なのに。それが本当の夕暮れとあなたは思うのでしょうか。

ウ 晴れやかな気持ちであなたを待とう、そんな風に思える、美しい雲の色なのに。誰のための夕暮として、あなたは心にかけているのでしょうか。

エ 悲しみながらあなたを待とう、そんな風に思える、美しい雲の色なのに。あなたに見てほしいと頼むこともできないなんて。

問7 本文中に(5)最も洗練せられた詩味の豊かな言語である。とあるが、そう言える理由の一つとしてあげられるものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア ひとつの言葉で二つの意味を包含しており、作者が心情を表現するのに便利であるから。

イ 「長む」という別種の言語の感じも付け加えられたことにより、憂鬱さを含んだ「見る」を表すのに適當だから。

ウ もともとは別種の語から派生した二つの意味を兼ね備えるため、歌に優雅さがかもし出されるため。

エ ただ「見る」という意味だけではなく、別種の言語の感じも加わることで意味が煩雜となり、奥深さが出るから。

3 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

僕らはいつしか、もので溢れる日本というものを、度を「A」許容してしまったかもしれない。世界第二位であった(注1)GDPを、目に見え

ない誇りとして頭の中に装着してしまった結果か、あるいは、戦後の物資の乏しい時代に経験したものへの渴望がどこかで幸福を測る感覚の目盛りを狂わせてしまったのかもしれない。秋葉原にしてもブランドショップにしても、過剰なる製品供給の情景は、ものへの切実な渴望をひとたび経験した目で見るならば、確かに頗もしい勢いに見えるだろう。だから、いつの間にか日本人はものを過剰に買い込み、その異常なる量に鈍感になってしまった。

へ a へ、(1) そろそろ僕らはものを捨てなくてはいけない。捨てるのみを「もつたいない」と考えてはいけない。捨てられるものの風情に感情移入して「もつたいない」と感じる心持ちにはもちろん共感できる。膨大な無駄を排出した結果の、廃棄の局面でのみ機能させるのだとしたら、その「もつたいない」はやや鈍感に過ぎるかもしれない。廃棄する時では遅いのだ。もしそういう心情を働かせるなら、まずは何かを大量に生産する時に感じた方がいいし、さもなければそれを購入する時に考えた方がいい。もつたないのは、捨てる事ではなく、廃棄を運命づけられた不毛なる生産が意図され、次々と実行に移されることではないか。

へ b へ 大量生産という状況についてもう少し批判的になつた方がいい。無闇に生産量を誇ってはいけないのだ。大量生産・大量消費を加速させてきたのは、企業のエゴスティックな成長意欲だけではない。所有の果てを想像できない消費者のイメージネーションの脆弱さもそれに加担している。ものは売れてもいいが、それは世界を心地よくしていくことが前提であり、人はそのためにものを欲するのが自然である。さして必要でもないものを溜め込むことは決して快適ではないし心地よくもない。

良質な旅館に泊まると、感受性の感度が数ランク上がつたよう位に感じる。それは空間への気配りが行き届いているために安心して身も心も解放できるからである。(注2) しつらいや(注3) 調度の基本はものを少なく配することである。何もない簡素な空間にあつてこそ、畳の目の織りなす面の美しさに目が向き、壁の(注4) 漆喰の風情にそそられる。床に活けられた花や花器に目が向き、料理が盛りつけられた器の美しさを堪能できる。へ c へ 庭に満ちている自然に素直に意識が開いていくのである。ホテルにしても同様。簡潔に極まつた環境であるからこそ一枚のタオルの素材に気を通わせることができ、バスローブの柔らかさを楽しむ肌の纖細さが呼び起こされてくるのである。

(2) これは一般的の住まいにも当てはまる。現在の住まいにあるものを最小限に絞つて、不要なものを処分しきれば、住空間は確実に快適になる。試しおびただしい物品のほとんどを取り除いてみればいい。

無駄なものを捨てて暮らしを簡潔にするということは、家具や調度、生活用具を味わうための(3)背景をつくるということである。芸術作品でなくとも、あらゆる道具には相応の美しさがある。何の変哲もないグラスでも、しかるべき氷を入れてウイスキーを注げば、めくるめく(注5)琥珀色がそこに現れる。霜の付いたグラスを優雅な紙敷の上にぴしりと置ける片付いたテーブルがひとつあれば、グラスは途端に魅力を増す。逆に、漆器が艶やかな漆黒をたたえて、陰影を礼賛する準備ができていたとしても、リモコンが散乱していたり、ものが溢れかえっているダイニングではその風情を味わうこととは難しい。

白木のカウンターに敷かれた一枚の白い紙や、漆の盆の上にことりと置かれた(注6)青磁の小鉢、塗り椀の蓋を開けた瞬間に香りたつ出し汁のにおいに、(4) ああこの国に生まれてよかつたと思う刹那がある。そんな(注7)高踏な緊張など日々の暮らしに持ち込みたくないと言われるかもしれない

い。緊張ではなくゆるみや開放感こそ、心地よさにつながるのだという考え方も当然あるだろう。家は休息の場でもあるのだ。しかし、だらしなさへの無制限の許容が「B」につながるという考えは、ある種の墜落をはらんではいまいか。ものを用いる時に、そこに潜在する美を發揮させられる空間や背景がわざかにあるだけで、暮らしの喜びは必ず生まれてくる。そこに人は充足を実感してきたはずである。

伝統的な工芸品を活性化するために、様々な試みが講じられている。たとえば、現在の生活様式にあつたデザインの導入であるとか、新しい用い方の提案とかである。自分もそんな活動に加わったこともある。そういう時に痛切に思うのは、漆器にしても陶磁器にしても、問題の本質はいかに魅力的なものを生み出すかではなく、それらを魅力的に味わう暮らしをいかに再興できるかである。漆器が売れないので漆器の人気が失われたためではない。今日でも素晴らしい漆器を見れば人々は感動する。しかし、それを味わい楽しむ暮らしの余白がどんどんと失われているのである。

伝統工芸品に限らず、現代の（注8）プロダクツも同様である。豪華さや所有の多寡ではなく、利用の深度が大事なのだ。よりよく使い込む場所がないと、ものは成就しないし、ものに託された暮らしの豊かさも成就しない。だから僕たちは今、未来に向けて住まいのかたちを変えていかなくてはならない。育つものはかたちを変える。「家」も同様である。

ものを捨てるのはその一歩である。「もつたいない」をより前向きに発展させる意味で「捨てる」のである。どうでもいい家財道具を世界一たくさん所有している国の人から脱皮して、簡潔さを背景にものの素敵さを日常空間の中を開花させることのできる纖細な感受性をたずさえた国の人たち返らなくてはいけない。

持つよりもなくすこと。そこに住まいのかたちを作り直していくヒントがある。何もないテーブルの上に箸置きを配する。そこに箸がぴしりと決まつたら、暮らしさすでに豊かなのである。

（原研哉「日本のデザイン」による）

（注1）GDP＝国内総生産。一年間に国内で生産した物やサービスの利益を金額で表したもの。

（注2）しつらい＝設備。飾り付け。（注3）調度＝日常に使う身のまわりの道具や器具類。

（注4）漆喰＝壁を塗る材料の一つ。石灰などを水で練つたもの。（注5）琥珀色＝半透明で、光沢のある黄色や赤茶色。

（注6）青磁＝青緑色の光沢が特徴的な高級磁器。（注7）高踏＝俗世間を離れて、孤高を保っているさま。（注8）プロダクツ＝製品。

問1 空欄「A」に入る語として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 増して イ 超えて ウ 外して エ 耐えて

問2 空欄「a」、「b」、「c」に入る語として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでの中から一つずつ選べ。ただし同じ語は二度入らない。

ア だから イ さもないと ウ しかし エ そして

問3 空欄「B」に入るカタカナ語として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア リラクゼーション イ アイデンティティ ウ イメージ エ コンセプト

問4 本文中に、(1)そろそろ僕らはものを捨てなくてはいけない、とあるが、なぜ筆者はそう考えるのか。最も適当なものを、次のアからエまでの
中から一つ選べ。

ア 不毛な生産は必要以上の廃棄を生み出してしまい、自然破壊に加担することになるから。

イ 消費者が所有の果てをイメージしにくくなり、廃棄せざるを得なくなるから。

ウ 不必要なものを廃棄することで、快適で心地よい空間を作り上げることができるから。

エ さらに大量にものを生産することで、企業の成長を加速させることができること。

問5 傍線部(2)これ、の指示語が表す内容として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 必要最低限のものを配した空間でこそ、ものの美しさを味わうことができるということ。

イ 良質な家具や装飾品をほどこすことで、新たな美意識が呼び起こされるということ。

ウ 人が整えた空間であれば、誰しもが快適に過ごすことができるということ。

エ 身も心も解放するためには、細やかな視野を大切にしなければならないということ。

問6 傍線部(3)背景の例として挙げられているものとして正しくないものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア しかるべき氷 イ ウイスキーを注ぐグラス ウ 片付いたテーブル エ ものが溢れかえったダイニング

問7 本文中に、(4)ああこの国に生まれてよかつたと思う刹那がある、とあるが、その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一
つ選べ。

ア 伝統的な工芸品の活性化を目の当たりにする、暮らしの余白ができたということ。

イ ゆるみや開放感のなかで、身も心も解き放たれたような心地よさを感じているということ。

ウ 現在の生活様式にあったデザインの導入がなされたことで、より一層簡素な空間を味わうことができたということ。

エ 洗練された空間のなかで、伝統的なものの魅力を味わう瞬間があるということ。

問8 この文章の内容に合致するものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 家を休息の場としてとらえ、開放感を第一にするような住まいへとかたちを変えていかなくてはならない。

イ ものの風情に感情移入することで、「もったいない」という心をさらに大切にしていくべきだ。

ウ 伝統的な工芸品を活性化するために、人気の回復に努めるべく、様々な試みが講じられている。

エ 簡素な空間の中で、ものの魅力を最大限に味わえる繊細な感受性をもつべきだ。

瀬戸内海、冴島に住む高校生の朱里、新、衣花の三人はある日、島にあるという「幻の脚本」について作家を名乗る霧島という男に尋ねられる。島外から突然やつてきた霧島に不信感を抱いた朱里たちは、以前から交流のある、島外から移住してきた本木という男に相談することにした。

これに続く次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

朱里が「これ」と母から頼まれたお裾分けの鯛の煮物と桃の瓶詰めを渡すと、本木が大袈裟なほど大きく「わあ！」と声を上げた。受け取ったタツバーカを開けると、うちと同じ味噌の匂いが周りに広がって、新や衣花を前に恥ずかしくなる。だけど、本木は上機嫌に「ありがとう、ありがとう」と喜んでいる。

〔注1〕明実さんによろしく伝えて。本当にすごく嬉しいよ。僕の生命線だから」「自炊しなそだもんね、モトちゃん」

「うん。おかげで生の野菜とみかんばかり食べてる」

魚が特においしいと言われる島の中でもつたいない話だと思うが、本木には、そんなふうに生活感が薄いところがある。田舎暮らしを自分から希望してここに来たはずなのに、なんとなくぼんやりとして頼りなく、危機感が薄いというか、生活に対する切迫感が薄い。「いい子なんやけど、(1) 今どきの子」というのが、朱里の母と祖母の、本木に対する共通意見だった。

島のおじさんおばさんたちから、仕事のことでも生活の仕方でも、怒られるたびに落ち込むそぶりを見せつつも、しばらくすると復活してくる姿勢を「へこたれない」と褒める人もいたし、「へらへらして」と悪く言う人もいたが、一年もすると、誰も何も言わなくなつた。

ここで生まれ育った朱里にはわからないが、(注2) Iターンたちに聞くと、島の住民の物言いは外の人には随分きつく響くらしい。限られた人間関係の中で、互いに思つたことをため込み、即座に相手に遠慮なくぶつける。けれど、それもまた、島の中のことだから、ぶつけ合つた後で長くそれを引きずることもない。怒られて、これはもうここで暮らしていくない、と思った翌朝に、無視されることもなく平然と挨拶されるようなことを繰り返したせいで、随分(2) 図太くなつた、と本木も言つていた。

夏でも自分で麦茶を作るようなことはなさそうな本木が、冷蔵庫から『さえじま』の商品であるみかん缶ジュースを出してきて、朱里たちの前に一本ずつ置く。自分でも一本プルタブを引く。首もとのタオルで頬の汗を拭つた。

〔霧島さん、(注3) 萩原さんのところ、昨日で辞めちゃつたよ」

霧島の話がしたい、ということはすでに伝えてあつた。けれど、聞いた言葉に仰天する。「もう、ですか？」と新が声を上げた。

「島に来て、まだ一週間くらいなのに」

「うん。萩原さんのところで一緒に働いてたのは、三日間だけ。まあ、萩原さんも忙しい時期だけのバイトだからって気にしてないけど、僕らみたい

な両方ともあんまり頼りにならない男一人しか今季の人材がいなくて申し訳なかつたな」

「霧崎さん、みかんの入つた袋^{さく}提げてたのに」

昨日の夕方、(注4)源樹に話しかけた彼の手には、みかんが入つたビニール袋が握られていた。だから順調に働いていたものと思つていたけど、荻原さんはきっと急に辞めるような相手であつても、ただそういうものだから、と自分の家のみかんを持たせて帰らせたのだろう。たとえ怒りながらでも「持つてけ」と、売り物にならない、傷ができたみかんを渡す。もつたいないからというのがその理由だ。朱里の母もそうだが、島の大人们には、そういうところがある。

本木が「珍しいことじやないよ」と口では言いながら、けれど、弱つたようにため息をついた。

「本当は、(2)そういうことされると、同じく伊ターンで来た者として肩身が狭いから困るんだけど……。たぶん、長くいる気もないんだろうなあ。霧崎さん、島のこともほとんど下調べなしにやつてきたみたいだし、口だけは“住む”って言つてるけど、実質は少し長めの観光滞在みたいな気持ちなんだろうなあ」

島に移住を考える人たちは、役場に問い合わせたり、現地に何度も調査に来たり、丁寧に情報を集める。本木もそうやって、冴島だけではなく、いくつかの場所の情報を集めたと言つていた。

けれど、霧崎はそうではない。初めから冴島に決めて、ネットと電話で手続きしただけで、直に現地に來た。

「“幻の脚本”については聞きました?」

「聞いた、なんとなく」

本木がますます困つたように笑う。

「島の中のものを探したいから、住んだり、溶け込もうとしたりつてことみたいだけど。でも、難しそうだね。現實にそんなものある?」

「それが聞いたことなくて」

新が首を振る。

「俺、演劇部だし、自分でも脚本書くから、島の図書館にある演劇の本とかは全部読んでたんですけど、その中では見たことないです」

「え、自分で脚本書くの?」

衣花が驚いたように声を上げる。新が「え、そうだけど」と照れくさそうに下を向くが、追及はやまない。

「今も書いてるの?どんなやつ?」

「ちょっとミステリ仕立てなんだけど……。もう、いいじゃないか、俺のことは。本当はそんなに興味ないくせに」

「ごまかすように最後はちょっと声を荒らげた。本木に向き直る。

「霧崎さんは、その“幻の脚本”を書いた作家のファンかなんかなんでしょうか?前にもその脚本を探しに來た人がいたみたいなんです」

どうしてそんな噂が立つたのかはわからないが、新が小学校の謝恩会に來たという本土からの客のことを話す。本木は黙つたまま聞いていたが、や

がて、聞き終えてから（3）ふいに眞面目な顔つきになつた。

話そなかどうか、迷うような表情を一瞬浮かべた後で「憶測を、話してもいいかな」と続けた。

「霧崎さん、ひょっとしたら、その脚本を自分のものにしたいんじゃないかな」

「え？」

「わからない。霧崎さんの人格を軽んじるような、本当に僕の思い込みの推測だよ。失礼もいいところなんだけど……」

「モトちゃん、前置きはいい」

衣花がきっぱりと言い放つと、本木が「うん……」と気乗りしない様子で頷いた。^{うなず}意を決したように続ける。「……誰も知らないからこそ、の『幻』なんでしょう？」

「はい」

「で、それを書いたと思われる脚本家は、その未発表原稿をみんなが探すような、たぶん、すぐく才能のある人」

「はい」

「そんな人が書いた脚本が、誰にも知られずにどこかにある。そして、霧崎さんは作家。……だけど、こう言つたらアレだけど、僕は名前を聞いたことがなかつた。つまりは代表作も、ないような状態なんだと思う」

「つまりこう『言いたいの？』

衣花が首を傾げる。

「霧崎は、幻の脚本を、ここで見つけて持ち逃げして、自分のものとして発表する。盗作するつもりだ、ってそういうこと？」

「憶測だけど」

本木が気まずそうに缶ジュースを飲む。朱里と新は顔を見合させた。ありそなことのような気がしてきたからだ。黙つてしまつた二人の前で、衣花が「舐められたもんだわ」と声を張り上げた。

「この島からなら、脚本を盗んだところで誰も騒がないとでも思つてるわけ？ あつきた。ふざけるんじゃないわよ」

「だから、憶測の域を出ない話だよ。衣花ちゃん、落ち着いて」

本木が困つたようにおろおろと宥める。とにかく、と続けた。

「霧崎さんの目的が、脚本にしかないことは明らかだと思う。ああいう人は、それはそれで人とつきあうのが苦手だから、大変だとは思うけど。

Iターン同士の集まりにも来ることは來たけど、やっぱり浮いてたし」

浮いている、というと聞こえがいいけど、それは言い換えると、衣花が昨日言つたような、『嫌われる』ということだ。Iターンとして島にやつてきただけど、島にも、Iターン同士で作るコミュニティからもあぶれて孤立する人や家をたまに見る。そういう人たちが島の家を引き払つてここを去るのを、朱里はいつも、（4）自分たちが追い出してしまつたような一抹の罪悪感を抱えて見送る。たとえ、その人と直接かかわることがなかつたとしても。

かかわらなかつた、という事実そのものに、よそ者を受け入れなかつたような心の狭さや後ろめたさを感じてしまう。Iターン同士での仲間はずれのような現象が起きるもの、見ていて気持ちのいいものではなかつた。だからこそ、衣花も『不穏分子』なんという言い方をしたのだろう。

「モトちゃんの言い方、優しいなあ。あんなの本人の責任じゃない」

衣花がまた、はつきりと言いたつた。

「あんなに上から目線で話してたら当然だよ。向こうに、仲良くしよう、うまくやつていうつていう気がないんだもん。仕方ない」

「ううかな。ひょっとしたら、本人はすごくつらいのかもしれないよ」

本木が言つて、意外に思う。彼の口調は至つて静かだつた。衣花が⁽⁵⁾怪訝そうに、本木を見つめる。

「仲良くしたくてもどうしていいかわからなくて、上からしか話ができる人もいる。—どうして相手が自分の話に靡かないのかもわからない。わからないから、自分をよく見せる話を重ねてしまつて、それがさらに距離を遠ざける。そんな感じなのかもしれない」

「そんなふうには見えないけど」

衣花が不服そうに頬を膨らませる。

「僕の、一意見だけね」と本木が穏やかに笑つた。

「霧崎さん、分析しちやうんだ。Iターンの飲み会でも、段階についての話をしてた」

「段階？」

「うん。島の人たちが、外の人間に對して心を聞いて、仲良くなつてくのには段階があるんだつて。たぶん、それもここに来る前に本とかで読んだんだと思うんだけど」

だとしても、よくそんなことをここで何年も先に暮らしているIターンの先輩たちに話せるものだ。本木が続ける。

「無関心が一番悪い状態。次は、文句を言われる。『都会の人間は嫌いだ』とか、構われるのは、相手が自分に興味がある証拠で、だけど、話しかけられてる以上は脈がある。次の段階として、『どこから来た』とか、興味を示される段階、『不便なことはないか』と心配される段階……と移っていく。自分は、来る時に、おしゃれなスーツケースを『気取りやがって』って島の人に言われたから、脈があるんだつて言つてた」

「バッカじやないの」

衣花が言い放つ。

「腹立つ！ そういうのが上から目線だつていうのよ。そんな段階段階ごとに、現実がきれいに色分けできるわけないじやない」

「うーん。そういう、親しさの段階分けみたいなものをしないと不安だつていうのは、同じIターンとしてわからないわけじやないけど、その一つ一つの段階を飛び越えるのつて、相当時間も必要だし、頭でそんなふうに考えちやうんだとしたらつらいだろうなつて思つたんだよ。ともかく、⁽⁵⁾霧崎さんはそういう“考える人”だ」

「ふうん」

衣花がまだ納得できない様子で鼻息を洩らす。どんな表情を浮かべたところで、相変わらず人形みたいにきれいな顔だ。その横顔がつまらなさそうにジユースを一口、口に運んだ。

(辻村深月「島はぼくらと」による)

(注1) 明実＝朱里の母親。 (注2) Iターン＝都会の出身者が地方で就職し、定住すること。または、そうして定住した人のこと。

(注3) 萩原さん＝冴島に住む、みかん農家の人のこと。

(注4) 源樹＝冴島に住む高校生。

問1 本文中に、(1)今どきの子とあるが、なぜ朱里の母と祖母は本木をそのように表現するのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの内から一つ選べ。

ア Iターンで来たものとしての自覚が薄く、生活がままなつていないように感じるから。
イ 田舎暮らしを希望してきたわりには、島での暮らしぶりに生活感が見いだせないから。

ウ Iターンで来た人たちの中でも特に、島の人たちに溶け込んでいるから。

エ 性格がほんやりとしていて頼りなく、人に手助けしてもらわないと生活ができない状態だから。

問2 本文中の、(a)図太くなつた、(b)怪訝そうに、のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでの内から一つ選べ。

a ア 打たれ強くなつた イ 何も感じなくなつた ウ 気が楽になつた エ やる気がそがれた

b ア 面目なさそうに イ 腹立たしそうに ウ 感慨深そうに エ 納得いかなさそうに

問3 本文中に、(2)そういうことされると同じくIターンで来たものとして肩身が狭いから困る、とあるが、このときの本木の心情の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの内から一つ選べ。

ア 同じIターンのものとして、口だけでは“住む”と言っているが、実際に住むつもりはないことに、閉口している。

イ 同じIターンのものとして、急に仕事を辞めるようないい加減なことをされば、島の人たちに面目が立たず、引け目を感じている。

ウ 同じIターンのものとして、目的のために手段を選ばずに行動していることに、怒りを感じている。

エ 同じIターンのものとして、何も考えずにいい加減な振る舞いをすることに、心底悲しみを覚えている。

問4 本文中に、(3)ふいに眞面目な顔つきになつた、とあるが、このときの本木についての説明として最も適当なものを、次のアからエまでの内から一つ選べ。

ア 霧崎の脚本家としての才能に思うところはあつたものの、それを口にするのは霧崎を軽んじることになるため、気乗りしていない。

イ 霧崎についての憶測を、朱里たちが本気にしてしまうことで、島での自分の立場が危ぶまれるのではないかと考え、迷いが生じている。

ウ 霧崎が幻の脚本を探している理由について、憶測にはすぎないものの一つの考えが思い当たり、まさにそのことを伝えようとしている。
エ 霧崎が幻の脚本を探す明確な理由を見つけたことで、はやくそれを伝えたいと考え、朱里たちに話そうと意を決している。

問5 本文中に、(4)自分たちが追い出してしまったような一抹の罪悪感を抱えて見送る、とあるが、なぜ朱里はそのように感じるのか。最も適当なものを、次のアからエまでのなかから一つ選べ。

ア 島で孤立している人が島を去るのは、島の住人が1ターンのコミュニティの邪魔をしてしまっていたことによるものだと考えられるため。
イ 島で孤立している人が島を去るのは、その人を受け入れなかつた島の住人の心の狭さによるものだと考えられるため。

ウ 自分たちが直接かかわりを持たなかつたことで、島で孤立した人が不穏分子であることをさらに際立たせる結果となつたため。
エ 自分たちが直接かかわりを持たなかつたことで、島で孤立した人に島の住人から嫌われているのだと勘違いさせてしまったため。

問6 本文中に、(5)霧崎さんはそういう“考える人”だ、とあるが、霧崎の人物像として最も適当なものを、次のアからエまでのなかから一つ選べ。

ア 人との関係性の構築において、理論と行動が伴つていないことが多く、考えと行動がちぐはぐな人。
イ 人との関係性を構築するためには、心や時間よりも理論が大切だと考えるような、冷淡な人。

問7 この小説の表現の特徴を説明したものとして最も適当なものを、次のアからエまでのなかから一つ選べ。

ア 感情の揺れ動く本木の視点を中心とすることで、幻の脚本の謎に翻弄される青年たちの心情を丁寧に描いている。
イ 朱里の視点から衣花の特徴と本木の特徴を対比させることで、朱里の中に芽生えた罪悪感を叙情的に描いている。
ウ 自然あふれる島の情景描写をほとんど用いず、あえて動作の描写にまとめてことで、揺れ動く人物関係を写実的に描いている。
エ 会話文の間に動作の描写を入れ込むことで、スピード感に話を展開させながらも、多様な人物を象徴的に描いている。